

五十嵐明要

ジャズアルトサクソフ奏者



D・エリントンなど、愛聴のCDを聴き練習する
リフォームで得た、シンプルな空間

いがらし・あきとし

1932年東京生まれ。高1の夏休みにバンドボーイとなり、翌49年にディキシー編成のバンドでプロ入り。一貫してビッグ・バンドのコンサートマスターを務める一方、実兄の故・武要(ドラムス)と共に「ザ・聞楽亭」を結成していた。日本ジャズ界偉才のアルト・サクソフ・プレイヤーは、89年には権威ある「アメリカ・モンタレー・ジャズ・フェスティバル」で喝采を博し、「ロサンジェルス国際ジャズ・フェスティバル」(92年)にも出演。94年には「JAPAN JUST JAZZ ALL STARS」の一員としてNYのアポロシアター、カーネギー・ホールで演奏する。

昭和20年代から名を挙げ、一貫してビッグバンドのコンサート・マスターとしてアンサンブルの支柱となってきた。どんな曲でもメロディーを吹かせたら、とりわけデューク・エリントンを吹かせたら右に出る者がいないと称えられる五十嵐明要さんは、その力強さと抒情性を兼ね備えた演奏に、「ワン・アンド・オンリー」の称号が与えられている。

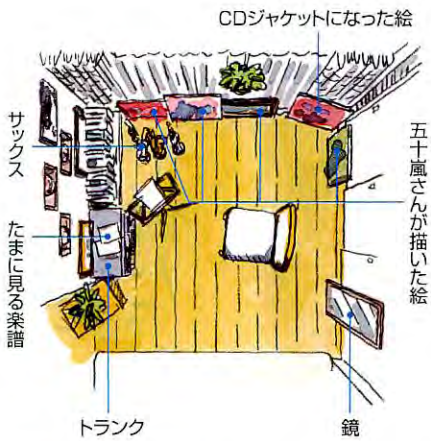
「演奏を聴き続けてくれたお客さんは、若い時の音ははじめていたねって言ってくれます。昔から音色はいいと褒められてきました。今さら演奏の仕方を変えて、どうこうという年じゃないし、枯れた音になっていいよと言われるのも嬉しくなった。今は自分が楽しめる方がいいかなと。それでお客さんが喜んでくれれば最高ですね」

ジャズ界の後輩までもが鬼籍に入る昨今、第一線でバリバリ吹く五十嵐さんは、まさに戦後のジャズ界の生き証人である。周りを見回しても同世代では尾田悟、北村

英治、杉原淳、原田忠幸、西条孝之助などの各氏が今も活躍している。「世界のナベアサダ」こと渡辺貞夫が五十嵐さんの音色に憧れて、宇都宮から上京したというのには有名なエピソードだ。

「勉強はいつでもやらなきゃいけないけど、今はレベルが落ちないようにやっていると、20分程度練習すればこれで大丈夫かなと分かります（笑）。たまには疲れてダメだと思ふこともあったり、演奏を始めてからまずいと思うこともあるけれど、ジャズに対する前向きな気持ちがあればいいの。その気持ち忘れちゃダメですね」

一般にアルトサクソ奏者は、ソプラノやテナーを吹くなどマルチ奏者でないとい仕事幅が狭められる。そんな中で、アルト一本を武器とした稀有の存在は、スイン



イラスト◎岩瀬のりひろ



部屋には他の楽器もあったが、五十嵐さんの潔さはプロとして、アルトサクソ一本槍で熾烈なジャズ界を生き延びてきたことだ。

やう。そうやりながら、自分なりの奏法を編み出していくんです」

創造への道をそう語るが、そこへ至るには他人には伺い知れない激しい道程だったろう。「仲間と言わせたなら、私が勉強しているなんて誰も思っていない」と軽口を飛ばすが、人知れず努力の末に独自性を築き上げた結果、「日本一豊かで美しいアルトサクソスの音色」と称賛されるようになった。

「若い時、ビッグバンドに加入するまでは小編成のコンボにいたんです。コンボの主体はアドリブで、アドリブの達者なプレイヤーが中心。でも、オーケストラはアンサンブルが重要だから、基本的な吹き方は決まっています。譜面に忠実に吹かず自由に吹くと、周りが付いて来られなくなっちゃう」

ビッグバンドのサクソスは、終始メロディーラインを担当する。他の管楽器は合いの手を入れることが多い。そんな華麗なサクソ奏者が、ジャズの真髄、アドリブを規制されるのでは、欲求不満は高くないのだろうか。

「コンボにはない醍醐味があるんです。リードアルトとなってサクソセクションを引っ張っていくと、やがて音色が一体になっていくんです。その醍醐味はやってみないと分からない（笑）。サクソスはクラシックで言えばヴァイオリンみたいなもの。オーケストラの主体になる花形なんです」

五十嵐さんは今まで、アルトを6本交換してきた。つまり平均10年に一回取り換えてきたわけだ。

五十嵐さんによれば、アメリカのジャズ・フェスティバルに招かれた時の現地のプレイヤーの話では、20年も30年も一本のサクソスを使う人もいないそうだ。

「ギツカケは単純。知人から古くてキラキラ光っていないよと言われて、見栄えのいい新品を買ったこともあったけど、新しいの音色は別もんだよ（笑）」

そんな五十嵐さんは東京・八丁堀生まれのちやきちやきの下町っ子だ。しかも生家は講釈場。界限には他にも講釈場や寄席が何カ所もあり、それらは雨で仕事にあぶれた職人たちが、昼間憩う娯楽場だった。そんな光景を見て育った五十嵐さんの芸事への関心は人一倍強く、生来のジャズのライブ感覚を育んだような気がする。

「講釈場は今ではライブハウスだったわけです。小さい頃から講談や落語が好きだったから、給食の時間になると先生に言われて、見よう見まねで喋っていた。それと父は映画好きでよく浅草に通っていた。だからか家にはたくさんSPがあって、兄とジャズっぽい軽音楽をよく聴いていました」

近所には当時盛んだったカフェが何軒もあり、店内では男女が嬌声を発したりダンスに興じていた。ガラス一枚隔てて伝わってくる草



グやモダンというジャンルを超えた独自のスタイルを築いてきた。「上手くなる早道は、尊敬するプレイヤーの演奏をコピーすること。私が影響を受けたプレイヤーは何十人もいる。そればかり吹くから、コピーした曲を吹くと今でもその人の癖みたいなものも真似ち

上/1994年の五十嵐さんのカーネギー・ホールでの演奏の様子。左下/「SATIN DOLL」はジャケットの絵も五十嵐さんが描いている。最近のアルバムは他に「SAX TALK」「SWING TIME」「HERE AT LAST」「WE3+THREE Salute to Sir Duke」「ALL OF ME」をリリース。右下/音楽生活60周年を迎えた円熟のプレーが、西新橋の「Daddy's Club」(TEL.03-3580-0081)、銀座の「JazzBar エムズ」(TEL.03-3574-5508)で楽しめる。

Otoko no Shosai



御年78歳ながら、現在も精力的にライブをこなす五十嵐さんは、「(自分の演奏に)満足がいなくなったら、やめようと覚悟しています」と言うが、このシンプルな空間で、日々、練習を続けている。



上の写真の右側の押し入れの中には、過去に使っていたアルトサックスが入って置いてあった(左上)。ほとんどの演奏曲の譜面が頭に入っているという五十嵐さんは、譜面も押し入れにしまっていた(右上)。好きなプレイヤーは、CDだけでなくビデオでも確認しているのだろう。五十嵐さんの浅草「HUB」での録画もあった(左下)。

楽的な雰囲気、五十嵐少年の心をいたく刺激した。総じてませた下町っ子は、早く大人になってカフェに出入りしたいと思っていた。「小さい頃から音楽が好きでした。家の近くに楽器屋があつて、そこにあるアコーディオンやトランペットが欲しくてね。でも、値段が高くて無理だった。やっと買ってもらえたのがハーモニカ。近所にも何人も吹く子がいたけど、私が一番上手かったかな(笑)」

少年はやがて終戦を迎え、10代後半に初めてアルトサックスを手にする。むろんその頃のものはもう無いが、部屋には愛用のアルトが、いつでも練習できるように置

かれています。独居の身となり、昨年壁を取っ払ってワンルームにリフォームし、生活と練習のしやすい、広いスペースが誕生した。「ここには38年ほど住んでいて、その前は世田谷に10年間暮らしていた。一戸建てだったから、隣近所に遠慮しないで思い切り練習できました。でも、ここは集合住宅だから大きな音は出せない。アルトの朝顔管に手ぬぐいを入れて音を控えめにしたり、低く吹いたり」

東京の住宅事情を考えると音楽家の苦労がしのばれる。何十人もたくさん作品をコピーし練習していたわけだから、レコードの存在も気になるが、世田谷時代にコレクションした約600枚のLPは、貸倉庫に保管中に盗まれた。現在手元にあるのは特に気に入るCDばかり。なかでもデュック・エリントンは手放せないという。「好きなのは美しくってロマンチックなもの。いい音をいつも探っています。そしていい音を出そうと努力している。その曲の中に完全に没頭しているというか、その中に入り込むように心掛けている」

今なお現役としてライブを行い、円熟した音色でファンを喜ばせる五十嵐さん。下町っ子らしく温かくて気風よく、ダジャレや地口をひよいと叩くいかにもジャズマンらしい洒落な話ぶりに耳を傾けていると、心底ジャズを愛する彼の気持が深く響いてきた。